



TITLE:

商品堆積の理論

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. 商品堆積の理論. 經濟論叢 1925, 21(1): 65-90

ISSUE DATE:

1925-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128299>

RIGHT:

京都帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號 卷 一 十 二 第

大正十四年七月一日發行

論 叢

國債利子及官吏俸給の免稅……………法學博士 神戸 正雄

自殺統計論……………法學博士 財部 靜治

米價と關稅との關係に就て……………法學博士 河田 嗣郎

說 苑

商品堆積の理論……………經濟學士 谷口 吉彦

インフレーションの意義并に標準に就て……………經濟學士 小川福太郎

マクスルの絶對地代と價值法則……………經濟學士 八木芳之助

雜 錄

パンタレオニ氏業績の回顧……………經濟學士 松岡 孝兒

ジエームス・新マルサス主義……………經濟學士 岡崎 文規

統計拾穗抄……………法學博士 財部 靜治

京都帝國大學經濟學會大會記事……………委 員

法 令

大正十四年國勢調查施行令・失業統計調查令・船檢船查規定中ノ改正

(禁 轉 載)

說苑

商品堆積の理論

谷口吉彦

目次

- 一 商品堆積の社會的形態（表面の二現象）——財の堆積の社會的三形態——未開人に於ける自然的堆積——自給經濟に於ける消費堆積——資本主義經濟に於ける二つの堆積形態）
- 二 生産資本の堆積（労働手段の絶對的並びに相對的増大——労働材料等の絶對的増大並びに相對的減少——労働力の轉形堆積）
- 三 商品資本の堆積（固有の意味の商品堆積——その相對的並びに絶對的増大——生産財たる商品堆積の絶對的増大並びに相對的増減——消費財たる商品堆積の絶對的並びに相對的増大——労働力の商品堆積）
- 四 商品堆積と流通行程（購買者としての商品堆積の要求——販賣者としての商品堆積の排斥——商人の介在——販賣の條件としての商品堆積——順當なる並びに變則的なる商品堆積）
- 五 商品堆積の變動（一般的傾向と一時的變動——季節的變動——物價騰貴による變動——物價下落による變動——堆積の動態に關する實際的研究と生産並びに供給の社會的統制）

一 商品堆積の社會的形態

『資本家的生産方法の支配して居る社會の富は、大げさな商品堆積 (Warensammlung) として現はれる。』此の意味に於て商品堆積は、資本主義經濟組織の具體的な一の特徴である。リーフマンが近世企業の特徴を擧げて、『市場への貯藏生産』²⁾にありとしたのも此の意味であり、ボルクトが商業の概念を決定するに當つて、多くの學者が重きをおく所の營利觀念よりも、寧ろ『其の商品が、顧客の側から集まつて來た直接の註文によらざる』³⁾點に重きをおき、『商業の概念は、正確に確定しない需要に對する貯藏を前提とする』⁴⁾と言つたのも亦、商品堆積といふ現象を側面から觀察したものであらう。蓋し單なる營利觀念は、必ずしも資本主義社會の特徴ではなく、苟も商業の存在した所では、フィニシアの昔に於ても既に存在した。唯其の營利觀念が生産界にまで侵入して、營利生産となつた所に、近世の資本主義社會が成立したのであるが、然る限り、其の生産は商品生産であり、市場生産であり、從つて其の具體的に表はれた所では、貯藏生産となり商品堆積となり得るものである。

併し乍ら他方に於て、資本主義の社會を構成する大部分の人間は、手から口への生活をなす賃銀勞働者であるから、彼等の消費生活の特徴は、其の生活に必要な財の貯藏を有し得ざる點にある。單に賃銀勞働者に限らず、今日最も典型的な資本主義的生活——文明國の都市生活——の少くとも或部面に於ては、謂はゞ市場から口への生活をなせるものであつて、消費行程に於ける

- 1) Marx, Das Kapital, I. S. 1.
- 2) Liefmann, Die unternehmungsformen, S. 2.
- 3) Borght, Handel und Handelspolitik, S. 3.
- 4) Borght, a. a. O. S. 3.

財の貯藏若くは堆積は、比較的小なる範圍に限られて居る。それ故に此の意味に於ては、資本主義の社會に於ける具體的な一の特徴は、反對に財の堆積の減少にある様に見える。更に資本主義の發達は、交通經濟に必要な物的並に人的の設備を完成するから、生産より消費に至る商品の流通は、極めて迅速圓滑に行はるべく、從つて其の間に存する商品の堆積は、次第に減少しつゝある様に見える。『資本家的生産の發展するにつれて、商品貯藏は減少すると主張する』學者のあるは、是等の故であらう。

斯様に財もしくは商品の貯藏に就いて、資本主義社會の特徴に關聯して主張する所の、互に矛盾する様に見える二つの見解——商品堆積の肯定と否定——は、果して何れを正當となすべきか？ 私茲にマルクスの所謂『貯藏の社會的形態の變化』に關する考察を參照する。

個人の經濟行爲が意識的に計畫せられ統一さるゝに至つた後の經濟生活に於ては、人間の生活に必要な物質は、多少の程度に於て貯藏形態を採るに至ることは疑ない。さうして此の貯藏形態は、マルクスに従へば、『實際のところ三つの形態を採つて存在する。生産資本なる形態と、個人的消費源なる形態と、商品貯藏又は商品資本なる形態とが其れである。』言ふ迄もなく茲に問題とする所は、財の社會的形態の存在であり、財が如何なる社會關係に於て存在するかを見たものであつて、然る限り、財の貯藏形態の存在は、學者の所謂經濟の成立以後に起る。ピユツヘアの所謂『自然人の經濟』時代にあつては、何等の社會的形態に於ても財の貯藏の存在しなかつたことは、學者の一致する所である。さうして學者の中には、未開人に貯藏の存せざる所以は、彼等の

5) Marx, Das Kapital, II, S. 111.

6) Marx, a. a. O. S. 115.

7) Marx, a. a. O. S. 111.

8) Bücher, Die Entstehung des Volkswirtschaft. I. S. 41—

9) Bücher, a. a. O. S. 18.—

性向といふ内的原因にあるが如く觀察するものも、¹⁰⁾ 少くないが、其の根本の理由は、寧ろ彼等の環境といふ外的原因によるものと考へらるゝ。たとひ個々の場合に於て、未開人の懶惰と自然財の缺乏とが併存する事實を見たとしても、此事は決して有力な反證とはなり得ないであらう。かくて學者の所謂經濟なき時代、自然人の經濟時代には、自然的形態に於ける財の堆積が存在したと見ることが出来る。何等かの社會的形態に於ける財の堆積は、此の自然的形態に於ける財の堆積が無くなつた原因ではなくてその結果である。豊富なる堆積の裡に生活する限り、人間は決して財の貯藏に伴ふ勞苦と危險を負担するものではない。此の點に於て、市場から口への生活をなす文明人の都市生活と、野から口への生活をなす未開人の放浪生活とは、相去ること遠からざるものであるとも言へる。

財の社會的堆積が表はるゝに至つた最初の時代は、所謂自給經濟の時代である。さうして此の時代に於ける財の堆積は、主として消費貯藏として存在する。『生産が直接に生産者の自給自足を目的として營まれ、交換又は販賣を目的として營まるゝ分が僅少の程度に止まり、従つて社會的生産物は毫も商品形態を採ることなく、又はその僅少部分のみ商品形態を採る場合には、商品形態に於ける貯藏(即ち商品貯藏)が富の極小部分を占むるに過ぎぬことは、最初より明らかである。然るに此の場合、消費源(就中嚴密の意義に於ける生活資料)の分量は、相對的に大である。これは古代の農民經營を見れば解ることであつて、かゝる經營の下に於ては、生産物の壓倒的大

部分は其の所有者の手に存する故に、商品形態を形成することなく、直接に生産手段若くは生活資料の貯藏に轉化する。それは商品貯藏なる形態を採るものではない。¹¹⁾『自給經濟の原則に立つて居た吾國の封建時代に於て、巨大なる財(米穀)の貯藏が、主として消費貯藏であつたことは、疑ない所であらう。さうして此の巨大なる消費貯藏が、少數の支配階級の獨占に歸して居た所では、彼等は到底尋常の方法を以つて之を消費し盡すことが出来なかつたから、茲に異常なる消費の方法が發明されて、後世の歴史家を驚かして居る。埃及のピラミッド、羅馬の劇場、ゴシックの寺院、支那の長城等、すべて一種の消費貯藏の顯現と見ることが出来るであらう。それ故に一般に財の貯藏の存することを以つて、今日の社會の特徴と做すことは正當でない。財の堆積の成立を以つて、資本主義社會に特有な現象であると做す者あらば、其は自給經濟に於ける消費貯藏を看過したものであり、『無邪氣な見當違ひ』¹²⁾である。

之に反して、資本主義經濟組織の下に於ては、此の種の消費堆積は、最初に述ぶるが如く、或部面に於て著しく減少するものであるから、此種の貯藏形態に關する限り、財の堆積の減少を以つて今日の社會の特徴と做す見解は正當であらう。けれども其れは、『貯藏の形態と貯藏そのものとを混同したもの』¹³⁾であつて、消費形態に於ける貯藏は減少したとしても、貯藏そのものは、他の社會的形態に變裝して、益々大なる程度に今日の社會に入つて來た。然らば資本主義の社會に於ける財の堆積は、如何なる形態を採つて現はれるか？ 其は主として『生産資本なる形態』と、『商品貯藏又は商品資本なる形態』となつて現はれる。さうして後に述ぶるが如く、生産資本

- 11) Marx, a. a. O. S. III.
- 12) Marx, a. a. O. S. IIO.
Adam Smith, Wealth of Nations, Bk. II, introduction (Vol. I, p. 258.—)
- 13) Marx, a. a. O. S. III.
- 14) Marx, a. a. O. S. III.

なる形態も亦、嘗ては商品形態を採つたものであるから、此の社會の下に於ける財の堆積は、少くとも一應は、商品堆積となつて現はれると言ひ得る。それ故に封建社會から今日の社會への推移は、財の堆積形態より見る限り、之を『消費貯藏から商品貯藏への轉化』¹⁵⁾と見ることを得べく、此の意味に於て、商品堆積の現象を以つて、今日の社會の一特徴であると做す見解は正當である。要するに姑く量的關係を度外におく限り、財の堆積形態は、何れの經濟社會にも存在するものである。唯それが各々の經濟組織を異にするに従つて、それに適應する各種の社會的形態を探るものであり、今日の經濟組織の下に於ては、其は主として商品形態を探れる堆積、嚴密には生産資本としての堆積と、商品資本としての堆積との二形態となつて現はれるものである。

二 生産資本の堆積

資本主義の社會に於ける財の堆積は、第一に『生産資本なる形態を採つた貯藏』¹⁾として現はれる。それは『既に生産行程内に存在する生産手段、或は少くとも生産者の手に在つて既に生産行程内に潜伏する所の生産手段』²⁾より成る。具體的に言へば、既に産業資本家の手に買取られて居る建物・機械・原料・燃料等が之に屬する。是等の財は、嘗て商品として市場に存在したものではないが、今や特定の産業資本家の手に買取られて、生産的に消費されつゝあるか、若くは消費さるべき運命にあるものであるから、既に商品たる性質を失つて居る。従つて此の種の財の堆積

15) Marx, a. a. O. S. III. Fn. 16)

1) Marx, a. a. O. S. III.

2) Marx, a. a. O. S. III.

は、之を固有の意味の商品堆積から區別せねばならぬ。

諸て、『素材的存在形態たる生産手段』としての堆積は、自給經濟に於ても、或程度に存在したものであるが、其は第一に、商品形態たる經過を経ずして生産物から「直接に生産手段……に轉化する」點に於て、第二に、營利的生産の手段即ち生産資本たる性質を缺く點に於て、資本主義經濟に於ける生産資本としての堆積と區別せらるゝのみならず、第三に、其の社會の總生産物に對する絶對的並に相對的の量的關係に於て、甚だしき相違を示すものである。然らば生産資本の堆積形態は、資本主義社會の發展するに従つて、如何なる量的變化を遂ぐるであらうか？

既に周く知らるゝ如く、資本はそれ自身の性質として絶えず自己を増殖する。資本の蓄積は、資本主義社會の發展に伴ふ必要的傾向であるが、蓄積されたる追加資本は、積極的には資本家の營利衝動に刺激せられ、消極的には彼等の消費に一定の限定の存するにより、必然的に再生産行程の擴張即ち生産規模の擴大となつて現はれる。然るに生産規模の擴大といふことは、即ち茲に問題とする所の生産資本としての堆積の増大を意味する。それ故に資本家の生産方法の發展は、必然に此種の堆積を増大するものである。然し乍ら生産規模の擴大が單に此種のものに限らるゝ限り、即ち個々の資本家の追加資本に基くものなる限り、それは社會的總生産物の増加に比例するものであり、従つてこれより來る生産資本の堆積の増大は、社會的總生産物の増加に伴つて其の範圍に於て起るものであるから、其は絶對的増加をなすに過ぎぬ。

然るに資本主義の發展は、個々の資本家の資本増殖と併行して、『多數小資本家の少數大資本

家への轉化⁴⁾、即ち固有の意味に於ける資本の集中が行はれ、其の結果として第二種の生産擴張が現はれる。更に資本主義後期の發展は、株式會社の組織による企業形態を發達せしめ、これに依つて第三種の生産規模の擴大が行はるゝに至つた。此の後の二つは、『其の行はるゝ範圍が、社會の富の絶對的増殖により又は蓄積の絶對的限界により制限されない』⁵⁾といふ點に於て、第一のものと異なる。換言すれば、社會的總生産物の増加に關係なく、社會の富が同一に止まる場合にも、行はれ得る所の生産擴張である。それ故に此種の生産規模の擴大に伴ふ生産資本の堆積の増加は、資本主義の發展と共に、單に絶對的に増加するのみならず、相對的にも次第に増大する。

然し乍ら謂ふ所の生産資本を構成するものには、第一に生産手段(P_m)と勞働力(A)とを包含し、第二に生産手段も亦、建物・機械等の勞働手段と、原料・燃料等の勞働材料及び助成材料とを包含する。さうして是等各々の絶對的並に相對的の増大に就ては、必ずしも右に述ぶる所と一致しないものがある。先づ第一に、生産手段を構成するものは、所謂不變資本を構成する部分なるが、資本主義社會の發展するに従つて、此の資本部分が、絶對的増大をなすのみならず、全資本に對する相對的割合をも増大して、茲に利潤率遞減の傾向を表すものなることは、周知知らるゝ所である。而して生産手段の一般に關する此の傾向は、主として其の中の建物・機械等の勞働手段、即ち固定資本に負ふ所である。『資本家的生産方法の發達すると共に、勞働手段の形で永久に生産行程と合體され、大なり小なりの期間絶えず反覆的に生産行程内に作用する生産手段(建物・機械等)は、不斷に増大する。……此の形態に於ける富が絶對的に増殖するのみならず、また

4) Marx, Das Kapital, I. S. 590.

5) Marx, a. a. O. S. 590.

相對的にも増殖するといふ事實は、就中資本家的生産方法を特徴づけるものである。⁶⁾

生産手段(P_m)の中、原料・燃料等より成る部分も亦次第に増大する。『生産規模が擴大し、協業や分業や機械などにより労働生産力が増進するにつれて、日々の再生産行程に入るべき原料・助成材料等の分量も亦、増大することゝなる。』⁷⁾さうして特に此種の生産手段に特有なる現象は、それが生産行程内に顯在して、現實の生産過程を経過しつゝあることを要するのみならず、同時に多少の程度に於て生産行程内に潜在して、現實の生産過程を待ちつゝある部分をも必要とすることである。即ち『是等の要素は、豫め生産の場所に準備されて居らねばならぬ。生産行程を流暢に進行せしむるためには……例へば毎日毎週消費さるゝ所よりも、多量の原料等をば、絶えず生産場所に蓄積して置かねばならぬ。』⁸⁾かくて生産資本の形態を採つた此種の貯藏の範圍は、絶對的に擴大さるゝことゝなる。』⁹⁾併し乍ら此の事は、必ずしも此の種の蓄積の相對的増大を意味するものではない。之を検するためには、更に一段の分拆を加へねばならぬ。

原料・燃料等の中、現實に生産行程を経過しつゝある顯在的部分に就ては、其の堆積の大小は、生産範圍にして同一なる限り、生産行程に要する時間の長短に比例する。種子を下して收穫するまでに半年を要する穀物生産と、一塊の綿花が織物となるに數時間を要する紡織業との間には、非常なる相違が存する。さうして一般的に言ふ時は、資本家的生産方法の發達は、生産に伴ふ自然的障害を排除して、生産時間を短縮するものであるから、此種の顯在的部分の堆積は、たとひ絶對的には増大したとしても、相對的には次第に減少する傾向を有する。第二に原料・燃料

- 6) Marx, Das Kapital, II. S. 112.
- 7) Marx, a. a. O. S. 112.
- 8) Marx, a. a. O. S. 112.
- 9) Marx, a. a. O. S. 112.

の中、生産の場所に準備されて居る潜在的部分は、二つの事情によつて制限せらるゝ。一は生産行程に先行する流通行程より來り、他は生産行程に後續する流通行程より來る。即ち第一に、『生産行程の連續を維持するためには、其の諸條件の存在が、日々の購買に際し生じ得べき中絶によつて左右さるゝことなき』¹⁰⁾を要し、第二に、『商品生産物が毎日又は毎週販賣せられ、従つて不規則的にのみ之を其の生産諸要素に再轉化し得るに過ぎぬとの事實によつても、左右さるゝことなきを要する。』¹¹⁾従つて是等二つの條件が、其の制限の程度を輕むれば輕むる程、此種の生産資本の堆積は、次第に減少する。それ故に、『かゝる貯藏は絕對的には増大しても、相對的には減少し得る』¹²⁾ものである。然らば此種の潜在的堆積を相對的に減少せしむる條件は、資本主義の發展と如何なる關係にあるか？

此の種の生産資本の堆積を減少せしむる諸條件は、要するに、『より迅速に、規則正しく且つ安全に、必要なる量の原料をば、常に中絶を來すことなく供給するといふ事實に歸する』¹³⁾のである。是等の條件と生産資本の堆積とは互に反比例し、『供給の安全と整齊と迅速とが小なれば小なる程、生産資本の潜在的部分、即ち生産者の手に在る所の加工を待ちつゝある原料其他の物の貯藏は、益々大とならねばならぬ。』¹⁴⁾さうして斯様な條件は、資本主義經濟の發達程度に比例して完備さるゝものであるから、此種の潜在的堆積は、資本主義の發達と共に相對的には減少することとなる。

かくの如くして、生産過程に於ける顯在的部分たると潜在的部分たるとを問はず、原料・燃料

10) Marx, a. a. O. S. 112.
 11) Marx, a. a. O. S. 112.
 12) Marx, a. a. O. S. 112.
 13) Marx, a. a. O. S. 113.
 14) Marx, a. a. O. S. 113.

等の堆積は、資本主義の發達と共に、絶對的には増大しても、相對的には減少するものであるが、併し乍ら此の事は、之を他方より見れば、後に述ぶる所の商品資本の堆積が、相對的に増加することを意味するに過ぎぬ。『今若し産業資本家の手に在る此の貯藏分が減少したとすれば、それは要するに、商品貯藏の形態で商人の手に在る貯藏分が増加したことを證するに過ぎぬ。例へば運輸機關の發達した結果、リヴァプール港の輸入倉庫に藏められて居る棉花が、迅速にマンチエスター市に移送され得るやうになつたとすれば、マンチエスター市の製造家は、必要に應じて比較的少量づゝ、其の棉花を更新し得ることとなる。けれども此の場合、商品貯藏としてリヴァプールに於ける商人達の手に在る同一棉花の分量は、それだけ益々大となる。要するに問題は、貯藏の形態變化といふことに過ぎぬ』¹⁵⁾のである。

最後に生産手段(P_m)と併立する所の勞働力(A)は、それ自身に於ては全く堆積形態を採り得ざることば明かである。併し乍ら、其れが原料の上に働いて、具體的形態に體化する時は、勞働力は茲に堆積しつゝあるものと見ることが出来る。例へば原料が生産行程に於て勞働を加へらるゝに従ひ、次第に其の形態を變化しつゝ經過することは、勞働力を一定の形態に堆積しつゝ進むものと見ることが出来る。而して斯の如く考へられたる勞働力の堆積は、生産時間と原料の顯在的分量とに比例すべく、生産時間及び之に比例する原料の顯在量は、絶對的には増大しても相對的には次第に減少の傾向を探ること、既に述ぶるが如しとすれば、勞働力の具體的堆積も亦、資本主義の發達と共に、絶對的には著しく増大したとしても、相對的には減少するものと見ねばなら

ぬ。

三 商品資本の堆積

最初に述べたるが如く、『資本家的生産の基礎の上に於ては、商品は、生産物の普遍的形態となる¹⁶⁾』ものである。勿論或る意味に於ける商品の存在は、必ずしも此の社會に特有なものではなく、資本主義以前の時代にも亦之を見た。併し乍ら此の種の商品は、生産行程の性質から必然に出で来るものではなくて、流通行程に於て偶然に商品となつたに過ぎぬ、然るに今日の商品は、生産行程より来る必然の結果として存在するものであり、其は生れながらに商品資本たる性質を特有する。それ故に『固有の意義に於ける商品貯藏¹⁷⁾』は、此の商品資本の堆積を意味するものであり、これが生産資本の堆積と對立して、資本主義社會に於ける二つの堆積形態を構成する。さうして生産資本も亦嘗て商品資本として存在したものであり、前者は後者の形態變化に過ぎぬから、姑く消費堆積を度外に措いて一般的な立言を許すならば、生産資本の堆積が相對的に増大することは、商品資本の堆積が相對的に減少することを意味し、その反對はまた反對を意味する。前者が増減し後者が減増すること は、『貯藏の社會的形態の變化』に過ぎぬ。

偕て、資本家的生産方法の下に於ける商品生産が、商品堆積を形成するに至ることは、其の生産の性質より来る必然の結果である。蓋し商品生産は、特定の購買者の注文によつて行はるゝ生

16) Marx, a. a. O. S. 114.

17) Marx, a. a. O. S. 114.

産ではなくて、一般市場に於ける一般購買者を目的とする生産を意味するからである。然らば此の意味に於ける商品堆積は、資本主義の發展と共に如何なる量的變化を見るであらうか？

第一に固有の意味の商品堆積も亦、商品生産の發展するに従つて、次第に其の相對的分量を增加する。『たとひ生産の範圍が同一であるとしても、資本家的生産方法の下に商品として存在する生産物部分は、資本主義以前の生産方法並びに發達のより、低き資本家的生産方法の場合に比し、遙かに大なるものである。』¹⁸⁾何故に此の如き商品堆積の相對的增加を生ずるかといふに、それは、『資本家的生産が發達するにつれて、生産の規模が、生産物に對する直接の需要によつて決定さるゝこと益々少くなり、個々の資本家の支配に屬する資本の大きさや、かゝる資本を増殖せんとする衝動や、生産行程の連續及び擴大の必要などによつて決定さるゝことが、益々著しくなる』¹⁹⁾からである。それ故に『生産の範圍が不變なる場合にも、生産物の商品形態が獨立化し固定化して成る商品貯藏は、資本家的生産の發達につれて、増大することゝなる。』²⁰⁾即ち社會的生産の總量が同一であるとしても、其の中に於て商品堆積を形成する部分は、次第に其の割合を増大する。さうして此の如く商品貯藏が相對的に増大するといふことは、既に述ぶるが如く、堆積の社會的形態の轉化したことを意味し、『一方に商品形態を採つた貯藏の増大するは、他方に直接の生産手段及び消費資料なる形態を採つた貯藏の減少した結果である。』²¹⁾

第二に固有の意味の商品堆積は、此の如く絶えず相對的に増大すると同時に、また、絶對的にも著しく増大する。何となれば資本家的生産方法の下に於て、勞働の社會的生産力が、恐るべき發

- 18) Marx, a. a. O. S. 114.
- 19) Marx, a. a. O. S. 115.
- 20) Marx, a. a. O. S. 114.
- 21) Marx, a. a. O. S. 115.

展をなしたことは、周く知らるゝ所である。さうして『從來の如何なる生産方法にも増して、勞働の社會的生產力を發達せしむる』²²⁾結果として、社會的生產物の總量は、此の生産方法の下に於て、著しく増大する。従つて商品堆積は、假りに其の相對的分量が同一に止まつたとしても、其の絕對的分量は著しく増大せねばならぬ。即ち『社會的總生産物に對する商品貯藏の相對量が増大するのみならず、同時に又その絕對量も増大することゝなるのは、要するに資本家的生産の發達するにつれて、生産物の總量が増大する結果である。』²³⁾

此の如くして、商品堆積は相對的及び絕對的に絶えず増大する。今その絕對的增加に就ては姑く問はず、それが相對的に増大するといふことは、曩に述べたる生産資本の相對的増大といふ事實と、果して兩立し得るものであらうかどうか？之を確かむるためには、商品堆積を更に分析せねばならぬ。元來商品は、商品として如何に巨大な堆積形態を形成したとしても、結局に於ては其の商品形態を個別的には失はねばならぬ。産業資本家を買ひ取られて生産資本に轉化するか、個人的消費者に買ひ取られて其の生活資料となるか、二者何れかの運命を選擇せねばならぬ。さうして個々の商品資本が、此の二つの轉化の何れに向ふべきかは、決して偶然の結果に出づるものではなくて、商品資本の素材的存在形態によつて、豫め運命づけられて居る。此の意味に於て商品堆積は、生産財たる商品堆積と、消費財たる商品堆積とに之を分解することが出来る。

第一に、生産財たる商品堆積がその商品形態を失ふ時は、流通行程を通過して再び生産行程に

22) Marx. a. a. O. S. 112.

23) Marx. a. a. O. S. 115.

入り、茲に生産資本なる社會的形態に轉化する。さうして此の生産資本としての堆積が、資本主義の發展に伴うて、絶對的にのみならず相對的にも増大するのは、主として其の中の勞働手段（建物・機械等）即ち固定資本の堆積に負ふものなることは、曩に述べたる所である。それ故に生産財の商品堆積の中、特殊の素材的形態を採るものは、生産資本として巨大なる堆積をなしつゝあるものゝ前提形態であるから、たとひ絶對的には著しく増大したとしても、相對的には寧ろ減少しつゝあるものと考へねばならぬ。事實に於て今日、工場の建築や機械の製作が、今尙ほ註文生産の域を脱せざるもの少なからざるは即ち是である。之に反して他の種の素材的形態を有する生産財の商品堆積——原料・燃料等——は、それが産業資本家に買ひ取られたる生産資本としての堆積に於ては、曩に述べたる如く、絶對的には増大しても相對的には減少すべきものであるから、其の商品形態に於ては、相對的にも益々その堆積形態を増大する筈である。綿花輸入商の倉庫に綿花が堆積し、石炭輸出港の埠頭に石炭が堆積するのは即ち是である。さうして商品形態に於ける堆積が、資本主義の發展と共に相對的に増大する第一の理由は茲にある。

第二に、消費財たる商品堆積が其の商品形態を失ふ時は、決して生産資本に轉化することなく、流通行程を通過して消費行程に入り、茲に人間の生命を創造する。曩に述べたる如く、商品生産が未だ一般的原則とならなかつた先資本主義の社會にあつては、社會的生産物の優越的部分は、消費堆積として存在したのであるから、此の如き時代には、此種の商品堆積は何等重要なる程度に達しなかつたものである。然るに資本家的生産方法の前提となつた賃銀勞働者の階級が發

生し、更に資本主義發達の結果として、此の階級が社會の壓倒的部分を占むるに及んでは、最初に述べたる如く、個人的消費の堆積形態は次第に消滅する。此の消費堆積の消滅の結果として、『年々に消費する所の總ての生活必需品及び便宜品』は、巨大なる堆積として市場に現れねばならぬ。是れ商品堆積が相對的に増大する第二の理由である。

最後に、それ自身に於て堆積形態を採り得ざる勞働力に就ては、それが商品堆積を構成せざることは明かである。併し乍ら勞働力が商品堆積を構成せざることは、之を購買し消費する資本家にとつては、極めて不利なる事情と言はねばならぬ。それ故に彼等は、勞働力の堆積の代りに、勞働力を創造し且つ支出する所の勞働者そのものをして、一の堆積形態を形成せしめんと努力する。工場の寄宿舎制度と、資本家の立場に於ける勞働設備の改善運動とは、即ちその顯現と見ることが出来る。

四 商品堆積と流通行程

資本家的生産行程が圓滑に進行するため必要な條件は、其の前後の流通行程が遅滞なく進行することである。一方に於ては、生産を繼續するに必要なだけの機械・原料・勞働力等の購買が、支障なく行はるゝことを要し、他方に於ては、生産の結果として出で来る商品が、なるべく迅速に販賣せらるゝことを要する。かくて産業資本家は、一面に於ては購買者として、他面に於ては販賣者として、全く相反對する性質を有する二つの極に直面する。此事が、産業資本家をし

て、各種の事情に於て互に矛盾する二面を有せしむることゝなるものなるが、他の諸點に就ては姑く措き、茲にはたゞ商品堆積に關する限りに於てのみ考察する。

購買者としての一面に於ける産業資本家は、其の生産を圓滑に進行せしむるためには、購買すべき商品が、商品堆積を形成して市場に存在するを必要とする。即ち『生産行程及び再生産行程を流暢に進行せしむるためには、或分量の商品(生産手段)が絶えず市場に存在すること、換言すれば貯藏を構成することを必要とする。』『商品貯藏なくしては、何等の商品流通も起り得るものではない。資本家は $W-G$ なる轉形に於て此の必然に落著しないとしても、 $G-W$ なる轉形に於ては落著するであらう。』之に反して、販賣者としての他面に於ける産業資本家は、之とは全く反對の要求を有する。彼れの製品 W' が、商品堆積を形成することなく、なるべく迅速に貨幣化されて、彼れの資本を急速に回収することは、その再生産行程を繼續するに必須の要件である。即ち『商品資本が貯藏を構成することは、自己の目的に反して心ならずも市場に滞留することを意味する。販賣が迅速に行はるれば行はるゝ程、再生産行程は益々流暢に進行する。 $W-G$ なる轉形に滞留することは、……資本が更に生産資本として盡すべき機能を妨げる』³⁾ ののであるから、彼れの立場としては、製品の市場堆積を排斥せねばならぬ。

斯様に、購買者としては商品堆積を要求し、販賣者としては之を排斥する所の産業資本家の二つの要求は、彼れ一個の立場より見る時は、彼れの購買すべき商品 W と、販賣すべき商品 W' とは、各々異なる商品であるから、其は或は矛盾なく成立し得るであらう。然し乍ら資本家階級全

1) Marx, a. a. O. S. 108.
2) Marx, a. a. O. S. 117.
3) Marx, a. a. O. S. 109.

體より見る時は、其は到底矛盾なく成立し得るものではない。何故かと言ふに、彼れの購買商品Wは、他の資本家の販賣商品W'そのものであるから、彼れが購買者としてWに對して有する要求——商品堆積の存在——は、同じ商品に對する他の資本家の要求——商品堆積の排斥——と矛盾する。又彼れの販賣商品W'は、他の資本家の購買商品Wと同一の商品であるから、彼れが販賣者として有する要求は、同一商品の購買者たる他の資本家の要求と矛盾する。之を一個の商品に就て見るならば、其の商品は特定の資本家の商品資本であるといふ立場から、迅速なる貨幣化を要求さるゝと同時に、他の資本家に買取られて生産資本に轉化すべき運命を有するといふ立場から、商品堆積を構成すべく要求さるゝ。

斯様に資本家的流通に伴うて存在する所の矛盾は、商人の介在することによつて、商品堆積に關する限り、一應の解決を見ることが出来る。『商品が終極の消費者に販賣さるゝまでの間、生産者自身之を貯藏して置かうとすれば、彼れは二つの資本を運轉せねばならぬ。即ち商品生産者として運轉する資本と、商人として運轉する資本とがそれである。』此の後の資本部分が、獨立の資本家によつて分擔さるゝ場合、其處に商業資本家即ち商人が成立する。さうして之を社會全體から見ると、『商品資本の順當なる經過の要件は、生産物たる商品の總體が消費さるゝこと』にあつて、商人の介在は、所謂消費不足に對しては之を如何ともすることは出来ないけれども、之を各資本家の立場から見ると、彼れの資本の順當なる經過の要件は、其の商品が單に販賣さるゝを以つて足るのであつて、其の販賣されたるものが其の先どうなるかは、一應は無關心たり

4) Marx, a. a. O. S. 118.

5) 河上博士、社會問題研究、第五十一冊二九頁、

得る。かくて商人の介在によつて、『貯藏が原産者の手に止まることなく、卸賣商人の手より小賣商人の手に至る種々の貯藏所を経過する』こととなり、一方には生産者の販賣を迅速ならしむると共に、他方には消費者の爲めに貯藏を提供して、一應の流通圓滑を期待することが出来る。

商品が堆積形態を構成することは、此の如く購買者の側から見て必要な條件であつて、販賣者の側から見れば、商品がなるべく堆積形態を構成せざることを希望する。併し乍ら一定の販賣を繼續し得るためには、販賣者の意思から獨立して、常に或程度の堆積を必要とするに至る。『與へられたる期間に亘つて一定量の需要を充すためには、商品貯藏は一定の大きさを有して居らねばならぬ。例へば一日の需要を充すためには、市場に存する商品の一部が流動を續けて貨幣に轉化されつゝある時、他の部分は絶えず商品形態を把持して居らねばならぬ。』此の意味に於て、商品堆積は常に購買者の立場より見て必要な條件たるのみならず、販賣者の立場より見るも亦、彼等の希望するところにと拘らず、『商品販賣の必要條件』と考へらるゝ。其は寔に販賣者としては一の necessary evil である。

此の如くして商品堆積は、二重の意味に於て流通行程の條件であると考へらるゝが、元來謂ふ所の商品堆積とは、流通の停滯を意味する。『商品が流通部面に滞留することなくしては、……何等の貯藏も存在し得るものでない。』之を逆に言へば、『如何なる貯藏も、流通の停滯なくしては、存存し得るものでない。』それ故に商品堆積が流通進行の條件であるといふことは、之を言ひ

6) Marx, a. a. O. S. 118.

7) 拙稿、資本主義經濟組織の下に於ける商業の一機能に就て、(經濟論叢第二十八卷第六號)

8) Marx, a. a. O. S. 117.

9) Marx, a. a. O. S. 177.

10) Marx, a. a. O. S. 116.

11) Marx, a. a. O. S. 117.

換ふれば、流通停滯は流通進行の條件であるといふことにある。流通を進行せしむるためには、之を停滯せしめねばならぬ。進めるためには止めねばならぬといふことは、それ自身の自己矛盾に陥つて居る様に見える。事實は果して如何であらうか？

併し乍ら此事は、單なる言葉の上の一の詭辯に過ぎないもので、事實は必ずしもさうでない。例へば一定の水流を永續せしむるためには、それに相應する水源を必要とするが、その水源そのものは水流の停滯を意味すると同様である。此の場合實際には、水源は、常に水流を一定の大きさに平均せしむるに必要な程度に止むべきものであつて、それ以上に及ぶ時は水流は枯渇すべく、それ以下に下る時は水源の意味をなさない。同様に一定程度の商品堆積は、商品流通を圓滑ならしむるために必要な條件ではあるが、併し其れは其の條件たる程度を超えてはならない。此の程度を超えることは、流通の停滯したることを意味し、商品流通の杜絶を意味する。反對にそれ以下に下ることは、流通の條件としての意義を失ふ。『商品貯藏が、商品流通の條件である限りに於てのみ……商品流通は順當のものである。反對に、流通貯溜内にある商品が、押し寄せ來る生産の波に席を譲ることなく、其の結果、流通貯溜が過充するや否や、流通は停滯して、商品貯藏の擴大を來たす』¹²⁾此の程度に達した商品堆積は、購買者側より見たる條件としては、益々其の條件性を具備することゝなるが、反對に販賣者側より見たる條件としては、最早その條件たる程度を超えて、耐ゆべからざる障害となつて來る。『此の場合、かゝる停滯が、産業資本家の貯藏内に生ずるか、それとも商人の倉庫内に生ずるかといふ問題は、關係する所でない。何れ

12) Marx. a. a. O. S. 119.

にしても（かゝる程度の）商品貯藏は、間斷なき販賣の條件ではなく、寧ろ商品の販賣されざる結果である。¹³⁾』

此の如くして順當なる商品堆積と、變則的な商品堆積とが區別せらるゝ。然し乍ら、『何れの貯藏も、流通の停滯を意味するものであるから、貯藏が順當であるか變則的であるかは、形態の上より區別さるゝものではない。¹⁴⁾』従つて兩者は稍ゝもすれば混同さるゝ處がある。殊にそれが、第一に『生産者の立場より見る時、商人の手に移轉された商品の流通行程が停滯するに拘らず、資本の流通行程は進行し得るものである』¹⁵⁾といふ事情により、第二に流通の停滯より生じた商品堆積を以つて、生産並びに消費範圍の擴大より生じた堆積形態の擴大であると誤認し得るといふ事情により、産業資本家の目を欺瞞して、變則的な堆積を順當なるものと誤認せしめ、若くは強いて自らを欺いて、所謂生産過剰を招致することゝなる。

五 商品堆積の變動

資本主義經濟の下に於ける固有の商品堆積は、第一に原料・燃料等の形に於て、第二に消費資料の形に於て構成せられ、且つ是等の堆積形態は、資本主義の發展すると共に、其の絶對量を増大するのみならず、また其の相對量をも増大しつゝ進むものなることは、既に述べたる所である。併し乍ら此の如き一般的傾向とは別に、更に仔細に觀察する時は、商品堆積の分量は絶えず變動しつゝあつて、茲に順當なる若くは變則的な堆積を現すことゝなる。之を例へば、物價の

13) Marx, a. a. O. S. 119.

14) Marx, a. a. O. S. 119.

15) Marx, a. a. O. S. 119.

變動が、長期に亘つて一般的騰貴の傾向を有しながらも、其の時々に於て、絶えず變動しつゝあると同様である。以下問題とする所は、此の商品堆積の一次的變動に關する。

商品堆積の一次的變動を惹起する原因として、二つの事情を考へ得る。一は生産の條件に關するものであり、他は生産の動機に關するものである。資本主義の經濟組織に於ける生産の動機——營利——は、生産の條件によつて制限せらるゝことが少くない。營利生産は、次第に生産條件を征服して之を隷屬せしめ、自己の意のままに生産條件を左右し得るに至つて、完全の域に達し得るものであつて、事實に於て今日の營利生産は、次第に此の域に進みつゝある。此の事は一定の社會に就て一般的に言ひ得るのみならず、各種の産業部門に就ても亦同様に言ひ得る所であり、生産條件を自由にし得る程度に従つて、其の産業の資本主義化は完全となる。營利生産による生産條件の征服は、次第に其の程度を高めつゝあるが、併し今日の事實に於ては、尙ほ其の拘束を受けつゝある部分は少くない。各種の産業、各種の生産條件の中に就て、原始生産業に於ける自然的條件は、其の拘束の最も甚だしいものであらう。今日の社會に於ける種々の經濟現象の中、所謂季節的變動をなしつゝあるものは極めて多數に存在するが、それ等の中の多くのものは、結局に於て、原始産業に於ける自然的條件への服從に基くものである。今問題とする所の商品堆積の變動が、一面に於て季節的變動を示すのも亦、此の例に洩れぬ。従つて商品堆積の季節的變動は、其の商品の生産が、自然的條件に左右せらるゝ程度に比例して、或は顯著に或は曖昧に現はるゝであらう。吾國の重要産業たる紡績業に就て見るに、其の原料たる棉花の生産は、言ふ迄も

なく自然的條件に左右さるゝこと最も大なるものである。例へば米棉の出盛期は毎年十一月、十二月、一月に限られ、印棉のそれは一月、二月、三月に限らるゝが如き是である。従つて棉花の堆積形態は、姑く何人の手に堆積するかを度外視する限り、是等の期間に於て最大を示し、且つ同様の現象が、年々略々同様に繰返さるべきことは明かであらう。之に反して、棉花を消費する生産行程即ち紡績業に於ては、勞働者の季節的勤惰の如き一種の自然的條件を除いては、其の生産條件が自然的拘束を受くることは極めて少ない。従つてその生産物たる綿糸の堆積は、之を棉花の場合に比較すれば、季節的變動をなすこと極めて少なかるべき筈である。それ故に綿糸堆積の變動は、寧ろ主として次に述べんとする事情によつて惹起さるゝと考へねばならぬ。

商品堆積の變動に於て、季節的變動よりも寧ろ重要なものは、産業資本家若くは商業資本家の營利動機より直接に來るものである。資本家が其の營利衝動を満足せしむるためには、單にその製品を販賣するといふだけでは足らず、それを一定の價格に於て販賣することにより、其の目的とする利潤の獲得を實現せねばならぬ。従つて彼れの生産する商品の價格、一般的には物價の變動が、商品堆積の上に重要な影響を及ぼすことになる。

第一に物價騰貴の傾向ある場合には、産業資本家は、其の購買者たる立場に於て、原料・燃料其他の購入を盛んにするから、それ丈けに於ては、潜在的生産資本の堆積を増加する。所謂手持原料の増加これである。同時に彼れは其の製品の賣惜みをなすから、商品資本の形に於ける堆積は、産業資本家の手に増大する様に思はれる。併し乍ら生産資本の潜在的堆積も、商品資本の堆

積も、それだけ彼れの資本の回收を後らしむることゝなり、餘分の資本を要することゝなる。従つて實際に於て彼れは、此の場合かゝることのために餘分の資本を用ふるよりも、寧ろ之を以つて生産擴張を行ひ、生産物の増殖を計ることゝなるから、茲に建物・機械等の形に於ける生産資本の堆積が現はれる。戦後の好況時代に於て、此種の堆積形態が如何に増大したかは、周く知らるゝ所であらう。

物價騰貴の傾向は、更に商業資本家の存在することに依つて、固有の意味の商品堆積を増大する。商人は種々の資本家の中にあつて、營利衝動を最も露骨に體現せるものであり、營利活動に於て最も敏活であるから、物價の變動を利用するに最も敏捷である。彼等は鋭敏なる嗅覺をもつて物價の傾向を眞先に嗅ぎ分ける。さうして苟も騰貴の傾向ある場合には、直ちに買占め賣惜みを實行する。それ故に物價騰貴の傾向ある場合には、原料も製品も生産者の手に於てよりは、寧ろ商人の手に堆積するであらう。昔に製品が生産者の手に堆積せざるのみならず、將來に於て生産さるべき商品までも、既に生産者の手を離れて商人の所有に入る場合が少くない。かゝる場合には生産者は最も有利な事情に置かれるから、あらゆる方法に於てその生産規模を擴大し、生産力を増大する。かくて生産物は、何れかの階段に於ける流通行程に堆積し、固有の意味の商品堆積は次第に擴大する。唯かくの如き物價騰貴の場合には、消費堆積も或程度に増大し、消費そのものも或程度の増加をなすことは考へ得らるゝが、併し此の場合に起つた生産の擴張と商品堆積の増大とは、此の消費若くは消費堆積の増大——實需の増加——とは何等の關係なく惹起された

ものであり、従つて其の勢の進むに従ひ、次第に生産過剰・消費不足の程度を促進して、其の極、遂に恐慌を惹起し、物價の傾向を轉化せしむるに至る。

第二に物價下落の傾向ある場合、最も鋭敏なる商業資本家は、第一着に買控へ賣崩しをなすから、商人の手にある商品堆積は、急激に減少する様に思はれる。併し乍ら其の賣崩しは、結局に於て消費者の購買能力に依存するものであり、物價下落の場合には、消費堆積も消費そのものも増大し得る筈なく、却つて減退すべきものであるから、商人の賣崩しは結局商人同志の肩代りをなすに過ぎず、之によつて商品堆積を減少せしむる程度は、比較的輕微であらう。唯商人の買控へは、それだけの程度に於て、彼等の手にある商品堆積を減せしむるであらうが、その代り生産者の手にある堆積を増大せしむることとなり、結局は生産縮少の程度に依存せねばならぬ。然るに生産規模の縮少は、その擴大ほどに容易でない。特に巨大なる生産資本としての堆積が横たはる場合には、學者の所謂結合生産費の原理が、生産時期を異にする同一商品の上に行はれて、『或る程度までは、年々損失をしても、事業を繼續して行く方が、却つて得になる』²⁾といふ事情が存するから、原料其他の生産費の下落の程度が、製品のそれに及ばない場合でも、尙ほ生産を一定の程度に繼續する場合が少くない。従つて此の場合生産者は、商人の買控への程度に生産を減少すること能はず、彼等の手にある堆積は著しく増大する。此の増大は、『商品生産者の知識より獨立し、其の意志に逆つて行はるゝ所の流通停滯に基く』³⁾ものであり、『貯藏が不任意的に形成された』⁴⁾場合である。従つて産業資本家の懊惱煩悶の時代であり、營利生産より來る必然の結果

2) 河上博士、社會問題研究、第三十六冊、二五頁、

3) Marx, a. a. O. S. 117.

4) Marx, a. a. O. S. 117.

を受くべき時である。

此の如くして商品堆積は、物價の變動によつて刺激せらるゝ資本家の營利衝動に依り、常に其の分量を變動し、其の所在を變更しつゝある。如何なる經濟組織を探るを問はず、社會成員の生活に必要な各種の財が、必要な程度に生産せられ、遲滞なく供給されて、その生活を保證することは、最も重要な根本問題なるが、今商品堆積の動態に就て、詳細なる實際的の指針を得ることは、其の社會成員の經濟生活を確保する上に極めて重要である。營利生産を原則とする今日の社會にあつては、其の研究は營利的生産者の生産に對し、並びに營利的商人の賣買に對し、一の科學的根據を提供するものである。又若し生産及び供給に關して、彼等の營利心による任意的統制にのみ依頼しては、社會成員の生活を確保する能はざるために、部分的にか全般的にか、生産及び供給の社會的統制を行はんとせば、之が根據は、商品堆積の動態に關する實際的研究に求めねばならぬ。併し乍ら是等商品堆積の實際に關する研究は、私は之を後の機會に譲るであらう。

(完)